

研究展望(平成15年)

高橋, 悠介 / 山中, 玲子 / 表, きよし / 伊海, 孝充 / 宮本, 圭造 / 橋本, 朝生 / 竹内, 晶子

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of
Nogaku Studies

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

2007-07-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007496>

研究展望 (平成十五年)

28号(平成12年単行本と平成14年分)、30号(平成12・13年分)に続き、今号では平成15年に発表された能・狂言関係の単行本および、雑誌等に掲載された論文を概観する。相変わらず「展望」というには遅きに過ぎ、またこの年に発表された膨大な数の研究すべてに触れることもできないが、論文・小論、研究とも関わるエッセイ等のうち、主な物を取りあげ、全体を、単行本(表きよし)、資料研究・資料紹介(伊海孝充)、能楽論研究(高橋悠介)、能楽史研究(宮本圭造)、作品研究(伊海孝充・山中玲子)、狂言研究(橋本朝生)、外国語による能研究(竹内晶子)の七つに分け、分担執筆している。演出・技法研究は数が多くなく、特に演出研究は作品研究と密接に関わるので、作品研究の中に含めている。全体に研究状況と展望するというよりは、各論文の内容紹介や記録に終始することになるであろうことを、あらかじめお詫びしておく。

単行本

『梅若実日記』五・六・七(梅若実日記刊行会編。A5判443・444・491頁。1・5・12月。八木書店。各二二〇〇円)

明治の能楽界を支えた能役者の一人である梅若実の日記の翻刻。明治時代の能の様子を詳細に把握することができる。

嘉永2年(一八四九)から明治41年(一九〇八)までの長期にわたる日記のうち、第五巻は明治24年(一八五一)までの長期にわたる35年、第七巻は明治36年(一八六三)～41年分を収録する。近代能楽史研究に重要でありながら、大部な上にきわめて難読なため従来十分に活用されてこなかった資料が、読みやすい形で刊行された意義は大きい。梅若六郎・鳥越文蔵監修、編集委員は印藤英明・氣多恵子・小林責・佐藤裕子・城崎陽子・永井美和子・西野春雄・林和利・三浦裕子・渡辺博之。

『能楽への招待』(梅若猶彦著。新書判190頁。1月。岩波書店。七〇〇円)

観世流シテ方で大学の教壇にも立つ著者による入門書。能舞台・能面などの一般的な説明もあるが、役者の「内面」の重視が強調されるなど独特の入門書となっている。岩波新書の一冊。

『能の囃子と演出』(高桑いづみ著。A5判292頁。2月。音楽之友社。四八〇〇円)

著者が取り組んできた能の囃子に関する研究の成果を集めた書。冒頭の「序にかえて 囃子のはたらき」では能における囃子の役割を笛と小鼓・大鼓に分けて説明する。「第一章 鼓胴の形態変化」では雅楽鼓胴から能楽鼓胴への形態の変化の様子を、中間的形態を持つ鼓胴の調査結果を踏まえながら考察する。「第二章 能管の奏でた音楽」は能管をめぐっての考察。世阿弥・禅鳳伝書や雅楽伝書などに基づく世阿弥時代の能管の様子や、一節切と能管の楽曲交流の実態、平岩流の特徴が明らかにされている。「第三章 謡と舞の古演出」では「ハヤフシ」「扇拍子」「オロシ」に関する詳細な考察がなされており、「第四章 登場楽の古態」では「早笛」「乱声」「渡り拍子」をめぐる論が展開される。様々な伝書の検討や困難な復元作業に基づく考察であり、能の囃子の歴史的な変遷を丁寧に解明している。

『能・狂言の生成と展開に関する研究』（林和利著。A5判338頁。2月。世界思想社。八五〇〇円）

「序章 系譜論・本質論」では、伝統演劇における舞踊脈と狂言脈という二つの流れについて、芸能における「踏む」ことの意味、狂言の滑稽性と美学をめぐる論が展開される。

「第一章 作品研究」では能（檜垣・鳥追舟）や狂言（末広かり・棒縛）の考察のほか、幸田露伴・谷崎潤一郎・芥川龍之介などの作家と能との関わりが取り上げられている。「第二章 歴史研究」は著者が鹿児島女子大学勤務時代に薩摩藩の記録を丹念に調べ上げてまとめた、中世末から幕末・維新ま

での薩摩における能の考察である。「第三章 伝書・資料研究」は名古屋女子大学に移ってからの名古屋の能の研究を中心としている。幅広い視野から能・狂言の研究に取り組んできた著者の成果がまとめられており、付録の資料も役に立つ。

『能楽囃子方五十年 亀井忠雄聞き書き』（亀井忠雄著、土屋恵一郎・山中玲子聞き手。A5判160頁。3月。岩波書店。三八〇〇円）

葛野流大鼓方の亀井忠雄が、土屋恵一郎・山中玲子との延べ十二時間にわたる対談の中で、五十年に及ぶ活動を振り返りながら能への思いを語る。「修業時代・能の世界を打ち分ける・観世寿夫について・大鼓から見た作品論・これからの能のために」の五章に分かれており、きびきびとした話の展開の中に演奏への細やかな心遣いがうかがえる。脚注で囃子の用語などが説明されているのが親切である。

『謡曲紀行 一・二』（小倉正久著。A5判490・498頁。5月。白竜社。一八〇〇〇円）

「翁」と宝生流現行曲一八〇番について、曲の舞台、曲の梗概と、物語や背景など著者が関心を抱いた事柄が記されている。著者は医師で、千葉県我孫子市医師会会報に十三年間連載したものに整理加筆して二冊にまとめている。

『まことの花』（梅若六郎著。A5判312頁。7月。世界文化社。二〇〇〇円）

観世流シテ方である著者が五十年の舞台生活をふりかえりながら綴った随筆集。全体が四編に分かれており、Iでは修

業時代の思い出、Ⅱでは能舞台や能面など能の様々な要素に對する考え、Ⅲは役者としての活動を通じて感じたこと、Ⅳは影響を受けた人々についての話が展開されている。

『狂言 三人三様 野村萬斎の巻』(野村萬斎・土屋恵一郎編。四六判280頁。8月。岩波書店。三〇〇〇円)

嵯川幸雄の巻頭言、山口宏子・土屋恵一郎が聞き手の「萬斎独言」、(萩大名・靱猿など八曲について萬斎・茂山千作・野村万作の考えが記される「狂言三人三様」、渡邊守章・いとうせいこうらが萬斎への思いを綴る「野村萬斎の世界」から成る。

『世阿弥 人と文学』(石黒吉次郎著。四六判224頁。8月。

勉誠出版。一八〇〇円)

全体が「世阿弥の生涯」と「世阿弥の作品」の二つに大きく分けられており、「世阿弥の生涯」では『風姿花伝』などの世阿弥伝書の記事を随所に引用しながら世阿弥の生涯を通観する。「世阿弥の作品」では前半で世阿弥の能楽伝書を概観し、後半で世阿弥作の能を概観するとともに(高砂・実盛)など五曲を具体的に紹介している。「日本の作家100人」シリーズの一冊。

『黒川能と興行』(桜井昭男著。B6判227頁。9月。同成社。二六〇〇円)

江戸時代における黒川能の様子を「興行」という観点から追究する。「序章 黒川能の里」で黒川能に関する基本的な事柄を説明した後、「第一章 黒川能と庄内藩酒井家」では

藩主による上覧能の諸相、「第二章 黒川能の興行と地域」では鶴岡や酒田など周辺地域から依頼を受けての興行の様子、「第三章 開帳能の様相」では能装束や能道具の修繕資金集めを主な理由とする開帳能の実態を、様々な資料を用いながら明らかにし、「終章 黒川能と近代」で明治以後の黒川能の活動にも触れている。江戸時代の黒川能が「王祇祭」だけでなく様々な需要に対応していたことや、多くの興行を行いつながりも神事能としての体裁を失うまいと努めている様子などが明らかに伝わってくる。同成社江戸時代史叢書17

『狂言 三人三様 茂山千作の巻』(野村萬斎・土屋恵一郎編。四六判290頁。9月。岩波書店。三〇〇〇円)

梅原猛の巻頭言、茂山七五三・土屋恵一郎が聞き手の「千作独言」、(末広がり・素袍落など八曲について萬斎・千作・万作の考えが記される「狂言三人三様」、喜志哲雄・高橋睦郎らが千作への思いを綴る「茂山千作の世界」から成る。「能・狂言 なんでも質問箱」(山崎有一郎・葛西聖司著。A5判186頁。9月。檜書店。一八〇〇円)

山崎有一郎の米寿を記念して、二〇〇一年から二〇〇二年にかけて横浜能楽堂で五回にわたって行われた講座に基づく、老ノ箱から五ノ箱に分けられ、山崎・葛西に役者をゲストとして交えながら、対談形式で能楽に関する様々な疑問への回答が示される。

『能楽用語集 観世流 前編』(江口金満著。A判変形346頁。9月。檜書店制作。三三〇〇円)

『観世流謡曲百番集』に収められた曲の詞章に見える語のうち、「神・仏・夢・幻他」「松・竹・梅・櫻・蓮・紅葉他」「春・夏・秋・冬他」「親・父・母・君・帝・王・翁・老人他」「生物」「風月」の各項目に該当する語を曲ごとに抽出している。

『能 梅若六郎』（梅若六郎・高橋昇著。A 6判変形254頁。9月。平凡社。一九〇〇円）

高橋昇が撮影した梅若六郎の舞台写真一五五曲分を収め、末部に梅若六郎の「舞の心」と友枝昭世の「視覚で伝える新しいかたちの「伝書」という文章が掲載されている。平凡社ライブラリー[®]シリーズの一冊。

『狂言 三人三様 野村万作の巻』（野村萬斎・土屋恵一郎編。四六判287頁。10月。岩波書店。三〇〇〇円）

加藤周一の巻頭言、土屋恵一郎が聞き手の「万作独言」、〈木六駄・棒縛〉など八曲について萬斎・千作・万作それぞれが万作への思いを綴る「野村万作の世界」から成る。

『世阿弥を語れば』（松岡心平編。B 6判306頁。12月。岩波書店。二二〇〇円）

編者と大岡信・横道萬里雄・水原紫苑・松岡正剛・多木浩二・渡辺保・丸谷才一・多田富雄・渡邊守章・観世榮夫・土屋恵一郎との対談を集成している。様々な分野で活動する人との対談を通して世阿弥に迫ろうとする。

『すらすら読める風姿花伝』（林望著。B 6判222頁。12月。

講談社。一六〇〇円）

『風姿花伝』の本文・現代語訳を載せ、部分ごとに解説を加えたもの。コンパクトで読みやすいが、「第一 年来稽古条々」以外は主要な段のみを取り上げているのがいささか残念である。

『白山信仰と能面』（曾我孝司著。B 6判183頁。12月。雄山閣。二六〇〇円）

白山を取り巻く美濃・越前・加賀における中世の能の様子を紹介している。著者は岐阜県の博物館・図書館・高校に勤務しながらこれらの地域に遺された能面や様々な資料を探し出し、戦国武将と猿楽、集落の神事能、白山信仰と能面などについて細かな考察を行っている。能が山間部にまで浸透し重視されていた様子が明らかにされている。

『能にアクセス』（井上由理子著。A 5判143頁。12月。淡交社。一六〇〇円）

「劇場に行こう」シリーズの一冊。「能を親に行く前に」「観ながら学ぶ能のしくみ」「劇場必携曲目ダイジェスト15」の三部から成り、能楽鑑賞の基礎知識を説明するとともに、初心者にお勧めの曲を紹介する。

『狂言絵本』（橋本朝生監修、恵谷眞生絵と文。四六判232頁。12月。白竜社。一八九〇円）

狂言の演目百曲を取り上げ、見開き右頁にあらずじとみどころ、左頁に曲のイメージを伝えるかわいらしい絵が掲載されている。取り上げられた曲は「市・商い」「旅・道」「参

籠・信仰」といった形で項目分けされており、狂言に親しみを感じやすい内容になっている。

『野村萬斎Mitsunobu no Kyōgen?』(野村萬斎著、網本尚子監修・解説。A5判127頁。12月。檜書店。二〇〇〇円)

狂言の登場人物や型、演出などに関する質問に野村が回答し、必要に応じて網本の解説が加えられるという形で、狂言鑑賞や狂言の理解に役立つ知識を提供する。主な曲のあらすじも紹介されている。

論文

【資料研究・資料紹介】

本年、管見に入った資料紹介は、謡伝書・近代史料の二本、資料研究は謡本の一本のみであった。

佐藤裕子「金剛流伝書『うたひの聞書』(影印と翻刻・解題)」(『演劇研究センター紀要』I。3月)は江戸中後期ごろ成立したと目される金剛流謡伝書『うたひの聞書』(愛媛県今治市河野美術館蔵)の紹介。奥付から信猶 鈴木久左衛門信猶)の転写本であることがわかるが、この人物については未詳。曲ごとに詞章をあげ、清濁・音程・流派の違いなどに言及する資料で、全九十三曲分所収。江戸期までの金剛流伝書は決して多くないので、その点でも貴重。同所には江戸後期書写の金剛流謡本も所蔵されているらしいが、これらの紹介も望まれる。

別府真理子「解題観世鏡之丞文書三点」(武蔵野女子大学『能楽資料センター紀要』14。3月)は能楽資料センターが写真撮影をした観世鏡之丞家文書三点の紹介。①笛方一噌包太郎の次男であり、鏡之丞紅雪に師事しシテ方の修業をした鏡二筆の『おほへ帳』。明治26年から33年までの八年間の演能記録が主体で、いくつかのエピソードも記載する。②鏡之丞華雪筆『過去牒』。鏡之丞家だけではなく、観世家の人々、他流派の役者を含めた約三七〇名の過去帳。③鏡之丞華雪筆『催能及一六稽古勤メタル回数抄』。一と六のつく日に行われていた梅若家の稽古で華雪がシテを勤めた演能を中心に記録した控え。①③からは、明治期の能界の一端を知ることができ

る。徐禎完「ソウル大学蔵謡本の基礎的研究(三)」(『名古屋芸能文化』13。12月)はすでに同紙で紹介されている車屋本系謡本(全二十帖)のうち、車屋本系ではないと推測されているB類(三帖)巻十八の研究。「砧」「敦盛」の諸本比較を行い、室町末期の上掛り謡本の影響下にあると位置づける。車屋謡本が否かの判定は、鳥養道断・新藏父子の関与があるか否かで決定することであり、詞章の系統が上掛りか下掛りかで断ずることではないだろう。現に道断は、上掛り謡本を借り書写しており、車屋謡本には上掛り系の詞章をもつ曲もあることが先行研究で指摘されている。「車屋本系」の判断もその点を加味する必要があり、さらに包括的な考察が望まれる。読者にもその判断ができるよう、図版の掲載も希望したい。

【能楽論研究】

本年の能楽論の本文研究最大の成果は、竹本幹夫による松廻舎文庫本影写本の『三道』の発見だろう。明治42年に吉田東伍が『能楽古典世阿弥十六部集』で翻刻紹介した『能作書(三道)』の底本である松廻舎文庫本の影写本が吉田東伍旧蔵書を保管する吉田文庫から見つかったのである。松廻舎文庫本は関東大震災で焼失しているため、『三道』の原形に迫る上で貴重な伝本といえる。これは5月の能楽学会例会で紹介され、その後、「吉田文庫の世阿弥能楽論資料紹介」(『文学』4-4。7月)、及び「吉田文庫蔵新出本『三道』について」(『演劇研究センター紀要Ⅲ』平成16年1月)の論文となった。『世阿弥十六部集』の本文との相違などについて問題点が指摘され、特に後者は新出の『三道』をカラー図版によって紹介している点でも有用である。また、前者では、吉田文庫や吉田東伍記念博物館から発見された、小杉本『申楽談儀』の原稿、吉田東伍が小杉本翻刻本文に種彦本や堀本との校異を書き入れた『申楽談儀』の存在も紹介する。明治41年7月刊の小杉本を翻刻した活字本は原稿と異同があり、その付録の種彦本校異や、同年10月に堀本との校異をまとめた『世子六十以後申楽談儀校異並補闕』にも漏れている異文があるなど、『申楽談儀』校訂上の問題点が指摘されている。

『花伝』については、表章『花伝』の書名と篇名をめぐって(『能と狂言』創刊号。4月)が『花伝』全体を指す呼称

の変遷―『花伝書』から『風姿花伝』を経て『花伝』へ―の経緯や背景を整理し、七篇それぞれの統一した篇名を提唱する。『花伝』を論ずる際に基礎となる呼称の問題であり、能楽研究者だけでなく、能楽に関わる諸方面にも普及することが望ましい論である。『花伝』の形成過程とその背景については、以下の二本。尾本頼彦『『花伝』物学条々の「舞がかり」―増補との関連とそれが意味するもの』(『演劇学論叢』第6号、12月)は、世阿弥伝書の中で『花伝』物学条々の老人・修羅・神の項に四例みえる「舞がかり」という言葉を含む部分がいずれも応永二十年代中頃までに増補されたと推定し、「舞がかり」とは、舞うことを専業とする人体の舞う舞に対して、神・老人・修羅という当時普通は舞を舞うとは認識されていなかった神体・人体が演じる舞風の演技を指している」と論じる。重田みち『花伝』第六花修の本文変更―義持新時代における世阿弥の転向―(『芸能史研究』103。10月)は、『花伝』第六花修の文脈を検討し、本文の変更部分とその背景を推定する。第六花修第三条の「たゞし、心得べき事あり」から「危からぬは強きなり」までは「幽玄」重視のものと「強き」の意義が影をひそめている点で、後に書き足された部分と推定でき、それは義満時代から幽玄を重視する義持時代へ変わった際の世阿弥の思想の転向を示しているとする。第三条のこの部分には敬語「給」が用いられているが、花修の中で「給」が用いられている第二条の一部分と、第四条末尾の一文もほぼ同時期に書き加えられたものとし、その

時期は第四郎への相伝の直前であったと想定する。岩崎雅彦「堯舜の説話と「家、家ニアラズ」(『鏡仙』514、5月)は『花伝』第七別紙口伝の「家、家ニアラズ。継グラモテ家トス」という諺について、これまで知られていた用例の他に、『法華経』に関する説話を集成した『直談因縁集』の用例を示し、諸例の文脈を検討する。特に、心敬の『ささめごと』と『直談因縁集』両者が共に堯舜の帝位継承をめぐる話と共にこの諺を用いている点は、足利義持が名君として堯舜にたとえられていたことと合わせ注目されるとする。

澤野加奈「世阿弥における物狂能の展開―「放下」「遊狂」「物狂」の語義の検討から」(『芸能史研究』163、10月)は、『三道』にみえる世阿弥の造語「遊狂」は箏を摺り羯鼓を打つ「放下」の歌舞的な挙動を指し、それは歌舞重視の動向の中で「物狂」の能のなかに「遊楽の見風」を導入していく手段となったとする。『三道』で「自然居士・花月・東岸居士・西岸居士」などの放下の人体による能の他に、(丹後物狂・高野・逢坂物狂)が「遊狂」とされるのは、単に精神的な狂乱をみせる「物狂」の能とは異なり、放下の体裁や箏・羯鼓を持つという要素によって「狂ひ」を表現するからだと解釈する。

天野文雄「世阿弥は佐渡から帰還できたか―『金鳥書』の成立事情の検討からみた帰還の蓋然性」(『能と狂言』創刊号)は、『金鳥書』からは世阿弥の達観的な心境がうかがえるとし、「薪の神事」と仮称される謡物の最終的な主題を当代

賛美と読むことができる点などから、世阿弥は佐渡から帰還できたとする。『金鳥書』は帰還できる見通しがついてから作った謡いものを、帰還直前の永享八年二月頃に記念としてまとめた書と位置づける。

なお、『文学』(4-4)には、二〇〇一年六月世田谷パブリックシアターにおいて、ピーター・ブルックが世阿弥の能楽論について語ったインタビューの翻訳「世阿弥と能について」(聞き手・沢 河合祥一郎)が、掲載されている。世阿弥の言う「花」に対する深い洞察、観客と役者の問題等、その指摘はどれも刺激的で、世阿弥の芸術論が現代の第一線で活躍する演劇人にも通ずる普遍的なものであることを再認識させるものだった。

禅竹能楽論に関しては、中沢新一『精霊の王』(B6版361頁、11月、講談社、二二〇〇円)が、大きな思想的枠組みから禅竹の思想を解釈している(本全体が能楽論をテーマとしているわけではないので、単行本の項ではなく本項で扱うことにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を読み込むもので、ユニークで興味深い指摘が多いが、禅竹能楽論に則して考える立場からすると、恣意的な解釈が気になる部分もある。また、本書は『明宿集』の現代語訳を巻末に載せているが、最終条が『太神宮参詣記』からの引用であるという理由で省略されているのは、当時の抜書についての意識を考えると残念な処置である。

【能楽史研究】

まず、能の成立をアジア演劇史の視点でとらえた論考から。二〇〇二年十二月に早稲田大学で行われた国際シンポジウムの報告書「東アジア世界の文化交流」（5月）には、東アジアの演劇に関する報告の記録が数本載るが、そのうち能楽史に關するものに、張哲俊「能楽と宋元雜劇と仏教」、吉村均「神仏習合と翁三番叟」、竹本幹夫「散楽・猿楽から能・狂言へ」の三本がある。

張論文は、能が元曲の影響を受けて成立したとする江戸期以来の説を見直したものだ。大陸と日本を往き来した禪僧が中国の雜劇の情報をもたらしたとするが、資料の解釈はやや妥当性を欠き、十分に説得力のある論にはなっていない。吉村稿は、チベット仏教の事例などを参照して、能の翁を神仏習合の一つの姿と見、呪師や修験者が釈迦を「もどき」として演じたものであるとする。随所に傾聴すべき指摘があるが、発表要旨をまとめた程度の短文であるのが惜しまれる。竹本稿は、散楽から能・狂言への展開を、仮面使用の歴史、囃子の展開などの問題に焦点をしばつて的確にまとめ、中国・韓国における雜劇との比較研究の必要性を述べる。

同じく東アジアの文化史の視点から（翁）を論じたものに、金賢旭「中世日本の渡来神信仰をめぐる」（『表象文化論研究』2。3月）、南聲鏑「殺される神考」（『演劇研究』26。3月）がある。金論文は日本において翁の形象をもつ神の多

くが渡来神であることに注目。そのうち摩多羅神や新羅明神の伝承を取り上げて、そこに託宣をもたらしチャーマン的性格を見るとともに、翁猿楽の成立とも深く関わっている渡来系氏族秦氏との関連を探る。南論文は、翁の三番叟についての論で、三番叟が醜い神として形象されていることに着目、醜い姿を持つ神が民俗伝承や神話においてしばしば死と結びついていること、韓国の仮面劇楊州別山台ノリに登場する黒面のミヤルの死の場面などを例に挙げて、三番叟の中に鎮魂儀礼としての性格が存すると指摘する。民間伝承の中に黒い翁姿と死のイメージを重ねる考え方があったとしても、それをすぎさま三番叟本来の性格と見るのは無理があろう。

中世能楽史に関する論文はこの年は少なく、高桑いづみ「新出史料「応永十九年称名寺日記」の演能」（『観世』6月）と宮永一美「戦国大名朝倉氏による芸能の保護と越前猿楽」（『芸能史研究』161。4月）の二本のみ。前者は、金沢文庫蔵の史料に見える応永十九年四月、称名寺大宝院での猿楽の記事を紹介したもので、その記事の後に西行の問答歌が引かれていることから、世阿弥により（江口）が上演された可能性を示唆する。関東における早期の演能記録として貴重な資料ではあるが、猿楽と問答歌を一連の記事と見て、世阿弥が演じたと見るのは、やや無理があるのではなからうか。後者の宮永論文は、越前猿楽を取り上げて、戦国時代以前の寺社における活動、越前以外の地での活動、戦国大名朝倉氏のもとの活動について、従来知られていなかった多くの新資料を活

用して跡付けるとともに、朝倉氏による芸能保護のあり方を考察する。これまでまとまった研究のなかった越前猿楽についての貴重な研究成果である。

中・近世移行期の能役者を取り上げたものに、伊藤潤「中世最末期の能役者と能芸観」(学習院大学国語国文学会誌)46。3月)がある。表章による先行研究の成果を踏まえ、武道に嗜みの深かった金春七郎氏勝の芸道観を考察したもので、武道を学ぶことにより、劇能としての新たな表現の可能性を模索した氏勝の試みは、その後の歌舞伎に大きな影響を与えたとする。その結論には容易に納得できないものの、氏勝の芸風についての論には傾聴すべき見解が少なくない。戦国期の能楽史については、ほかに小文ながら、宮本圭造「戦国武将山岡景隆と能」(月刊『能』546。11月)があり、「江州山岡美作守景隆所持」と銘のある小尉面を手がかりに、近江の戦国武将であった山岡景隆の演能活動を紹介する。

続いて近世能楽史に関する論文。小林健二「中津藩の神事能」(『能楽研究』27。3月)は、鴻山文庫蔵「中津藩能番組」についての考察。同書は寛永から文化にいたる中津藩での演能の記録をもとに編纂された資料で、曲別に各年次ごとの出演者を列記するが、その内容をデータ化することによって、同書の主体が中津の大貞八幡の神事能番組であることを検証する。あわせて出演役者についても考証を加える。

表章「大鼓金春流」考(下の二)(同)は大鼓金春流の歴史についての一連の論考で、今回で完結。初代金春三郎右衛

門の子を祖とする広島藩の金春市左衛門家の代々、その別家、および大鼓金春流の斉田家の代々についての考証が今回の中心で、広島藩・水戸藩・彦根藩・加賀藩・尾張藩など、各地の能楽資料を存分に活用した重厚な内容になっている。末尾に付された「大鼓金春流略年表」も、これまでの綿密な調査成果に基づく有益な資料である。

延広由美子「徳川家定の將軍宣下祝能」(『異文化交流』特別号。3月)は、嘉永六年から安政元年にかけて行なわれた十三代家定の將軍宣下能について、『藤岡屋日記』『梅若実日記』『触流し御能組』『続徳川実紀』所載の番組を対照し、関係記事を紹介する。他の將軍宣下能の番組との関連、宣下能に出席した勅使の動向などにも論及するが、やや未整理な感があり、將軍宣下能の変遷を踏まえた更なる考察が求められよう。

権藤芳一「御即位御能番組」(『芸能史研究』163。10月)は、片山家蔵の即位能番組を翻刻。宝永八年の中御門帝から嘉永元年の孝明帝まで、七度の即位能の番組を集めた資料の紹介である。禁裏能の番組には、いずれも未翻刻の「禁裏仙洞御能之記」「乱舞番組」などがあるが、本資料とはいくつか異同も見られる。両者を対照して活用することが望まれよう。

同じく上方の能番組を取り上げたものに、恵阪悟「関西大学図書館蔵『勸進能并狂言尺番組』総索引」(『国文学(関西大学)』87。12月)があり、江戸期の大阪勸進能・勸進狂言の

番組集から曲名・役者名を抽出した索引を載せる。

ほかに、寛文十一年刊の仮名草子「私可多咄」に見える能関係の笑話をもとに、近世の能受容の一面を紹介した西哲生「私可多咄」にみる近世の能楽享受」（武蔵野日本文学）12。3月）、斉藤月岑の『武江年表』から能の関連記事を抽出した松田存「幕藩体制下の猿楽能」（総合芸術としての能）9。8月）、寛文三年の禁裏能の記録を紹介した重田みち一「舟橋経賢による寛文三年禁中能の記録」（『能』54）。6月）がある。

『梅若実日記』の刊行を受けて、この年も近代能楽史に関する論文が多く発表された。近代能楽史研究の活況はここ数年の傾向であり、今後ますます盛んになっていくであろう。三浦裕子・氣多恵子・城崎陽子（『梅若実日記』の登場人物たち）（『能楽資料センター紀要』14）は、その『梅若実日記』に見える膨大な人名のうち、梅若実の縁戚にあたる人物を中心とする百名を越える人名の履歴をまとめたもの。末尾に索引も付す。

横山太郎「能楽堂の誕生」（『表象文化論研究』2。3月）は、芝能楽堂建造の経緯を跡付けるとともに、それが明治の能楽復興の象徴として「歴史化」された背景を明らかにする。その指摘は史料の丁寧な読みに基づけられており、いずれも説得力がある。青木涼子「女が能を演じるといふこと」（『楽劇学』10。3月）は、明治期に活躍し、後の女流能の基盤をつくった谷村甲子と山階明子の活動を、文献資料のみならず、聞き取り調査をも行なって生き生きと描く。

天野文雄「伏見稲荷大社の能舞台」（伏見稲荷大社「朱」46。3月）は、明治十五年に金剛謹之輔が中心となって創建された伏見稲荷大社の能舞台建設の経緯と、同舞台で催された演能の動向を辿ったもの。観梅問題の渦中にあつた梅若万三郎・六郎兄弟による昭和四年の奉納能にも論及する。末尾に付された「伏見稲荷大社能舞台年表」も有益。宮本圭造「檜書店創業のころ」（『観世』2・3・4月）は、檜書店蔵の証書類をもとに、山本長兵衛から謡本の版權を譲り受けた檜家が幕末・明治にかけて謡本書肆として成長していく過程を明らかにする。伊藤真紀「能における「我」の行方」（明治大学『文芸研究』89。1月）は、大正四年の佐々政一の「能楽滅亡論」を契機として起こった一連の論争を取り上げて、その論争の背景に潜む能楽に対する世代間の認識の相違を見る。

続いて能面・能装束関係の論文。小山弓弦葉「初期唐織の編年に関する考察」（『MUSEUM』585。8月）は、東京国立博物館蔵の金春家伝来能装束についての論。『太閤記』や『隣忠見聞集』などをもとに、金春家伝来の唐織の中に豊臣秀吉からの拝領品が多く含まれることを確認した上で、現存唐織の作例を詳細に検討し、秀吉ゆかりの高台寺打敷との共通性などを指摘して、慶長年間に編年づけられる貴重な作例であるとする。能装束の研究はしばしば作品の検討のみに偏る傾向があるが、記録類をも活用し、能装束伝来の歴史的背景を明らかにしたすぐれた論。

保田紹雲「因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に關する考察」(『名古屋芸能文化』13。12月)は、大正八年に売り立てられ、現在各所に分蔵される鳥取池田藩旧蔵の能面についての考察。池田藩旧蔵面には面裏に入手の年時や作者を示す漆書が記され、近世能面史に多くの手がかりを提供しているが、保田稿はその朱漆書の用語の検討に始まり、鳥取藩が能面を収集した経緯などを詳細に論じる。ただし、同稿が朱漆書に見える「伏見」を江戸の道具商伏見屋であるとするのは失考で、宮本が見市泰男氏とともに、「鳥取池田藩における能面収集をめぐって」(芸能史研究会01年5月例会)と題する報告で指摘したように、鳥取藩の京都伏見屋敷とすべきであろう。保田稿はこの後、更なる膨大な資料の調査成果をもとに『名古屋芸能文化』14・15に続考をまとめているが、そこでは「明記されていないもの(右の指摘を受ける形で訂正されている。内海靖子「泉屋博古館の面をめぐる近代」(『泉屋博古館紀要』19。3月)は、泉屋博古館蔵の住友春翠収集の能面をめぐる考察で、入手年時・経路ごとに分類して、主要な事例について詳細に検討。第二章「住友春翠の趣味と能・狂言」では、春翠の伝記「住友春翠」をもとに、彼の能愛好の歩みをまとめ、能面収集の背景を明らかにする。近代の能のパトロンの姿を能面収集という視点から論じた労作である。

【作品研究】

室町後期・末期の作品研究は本年も精力的に進められたが、

それに加え、世阿弥時代の作品に関する論考が多く出た年でもあった。以下、大まかには時代順に概観するが、執筆者や雑誌、あるいはジャンルごとにまとめている部分もあることをお断りしておく。

大谷節子「物狂能遡源」(『能と狂言』創刊号)は、「思ひ故の物狂能」のうち、氏のいわゆる「甲類」は、「全て幼い子と親の別離再会譚を構想の骨格としている」とし、「出家型」「追放型」「身売り型」それぞれの古曲と、その淵源と見なしうる「出家因縁譚」(これらの発見・紹介自体が大きな成果)とに精緻な吟味を加え、「物狂能は、出家(身売り)をめぐる孝養と恩愛の葛藤と大団円の結末を持つ、因縁譚の類型から生まれた」との結論を導く。同「敷地物狂」の位置(『国語国文』72(2。2月)は、右の総論に対する各論ともいえる、作品研究。同曲が「高僧の出家因縁譚の類型を基に作られ」ていることを、資料に基づき示した後、同じく出家因縁譚を淵源に持つ(丹後物狂)との比較から、「敷地物狂独自の趣向や達成を明らかにしていく。本来は夫婦が登場する物狂だったものを、母のみ登場の物狂に改変したのであろうこと、別離と再会の枠組みを「向去却来」という禅語で捉えなおしたことで、追善説法の場を涅槃会と重ねることで「恩愛の強調」を図っていること等が説かれている。同じく物狂能に関する論に、西村聡「(花筐)達成論の更新」(『金沢大学文学部論集(言語・文学篇)』23。3月)があり、傑作として高い評価を得ている(花筐)が未解決のまま抱えている諸問題を

とりあげて考察している。結末部の「哥」で「シテが国母に上り詰める」古形は「中世的な本地物の骨格を」持ち、世阿弥は、そうした「筐の女御」の前世譚を統一する新たな主人公として、史実とは別に天照大神に通じる照日前を創作したとする。また、後場のシテ登場段の道行きと続く狂乱の段には恋の不安と絶望を見、一方「李夫人」の曲舞を舞う段は、帝の恩寵のありがたさを強調するのが目的と、それぞれ説得力のある読みを示す。澤野加奈「世阿弥における物狂能の展開―「放下」「遊狂」「物狂」の語義の検討から―」については「能楽論研究」の項で触れている(115頁参照)。

平林一成「能〈守屋〉の戯曲構造に関する試論」(『演劇研究センター紀要』Ⅰ)は、〈守屋〉の特に後場に注目、阿部泰郎によって示された典拠と比較しつつ分析し、守屋と太子「両者が相互に付随しながら一つの真理を体現する」と捉える当時の理解に添った戯曲構造であることを示す。その上で、本曲に関する世阿弥の発言について、「守屋の首を斬る」場面も謡どおり写実的に演じていた井阿弥原作に対し、謡と演技の「一対一の対応関係」をやめ、首を斬る所作も「謡のみで表現せよ」という提起ではないかと読む。後場の分析自体も、世阿弥の批判に「総合芸術としての能楽が画期的な変貌を遂げていくための種子が胚胎している」という結論も興味深かったが、世阿弥による改訂について、最後に十数行で触れているのみなのは残念。さらに詳しい論の展開を期待したい。

天野文雄「〈老松〉の主題と成立の背景―応永二十七年秋冬の義持の大患をめぐって―」(『演劇学論叢』6)は、世阿弥時代の政治状況と作能の関連を考察する論考。〈老松〉が御代ではなく「この君」の長寿(延命)を強調していることを手がかりとし、飛鳥井雅縁の『雅縁卿千首』の「龜」歌や義持周辺の禅僧による「叙」や「記」との共通点を根拠に、この曲が応永二十七年秋冬の將軍義持の大患を背景に製作されたと推測する。同「合浦」の成立と南北朝統一―明徳三年の神璽(勾玉)の京都帰還をめぐって―(福田晃監修「伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能―」三弥井書店。1月)も、同じく王権と作能の関係を探る論で、永享四年に矢田猿楽の演能記録があり、従来「異類報恩譚」という童話的作品として解されることの多かった「合浦」を、明徳三年の南北朝合一に際しての神璽帰還を祝福するために制作された曲として読む。その根拠として、後代の史料ながら『鹿苑院殿百年忌陞座』に南北朝統一を「合浦還珠」に喩え、称賛する一節があること、終曲部に「蒙求」「妄還賞珠」を踏まえた「玉はふたたび、帰る御代の」という、童話的作風にそぐわない一節があり、これが神璽帰還の寓意となっていることの二点を挙げる。能が時の権力者の意に叶うところを狙って作られることがあるのは、以前から指摘されていたことだが、天野稿の手法はより具体的にある特定の事件・事例と結びつけて作能状況を考察するところに特徴がある。個々の作品の成立背景の考察だけでなく、大成期に能がいかに作られたかとい

うことへの大きな問題提起となっている。

雑誌『観世』の特集に合わせた作品研究は、二本が世阿弥時代の能を扱う。松岡心平「箱崎」の背景についての覚書(『観世』7月)は、当時、復曲作業中であった(箱崎)のレポートを兼ねた論考。『三道』の模範曲として挙げられている神能に九州を舞台とする能が三曲あることを足がかりに、作品の背景に、義満政権下の最重要政治課題であった九州問題を見る。そのうえで、蒙古襲来以来注目をあつめていた神功皇后を祭る筥崎宮を舞台とし、皇后をシテとする能を作ることには、九州平定を寿ぐという目的があることを推測する。武久堅「作品研究(屋島)」「(観世)」8・9月)は、上・下に分けて掲載。「上」は(屋島)の典拠を中心とした論考で、『平家物語』では義経が弓を拾ったことを咎める人物の名を挙げないが(屋島)では「兼房」としている点から、『義経記』の「関与」を説き、従来の(屋島)成立論に新たな視点を提示する。「下」では、夢幻能のワキがシテを成仏へと導く役となることが多いのに対し、(屋島)のワキは、初めからシテの救済という使命から開放されており、救済どころかシテを「閻浮の故郷」「修羅の巷」に呼び戻す「天魔」としての使命を負っている、という読みを示す。

このほか、小川佳世子「世阿弥晩年期の能の表現と応永期の連歌―「看聞日記紙背文書連歌」をめぐる―」(『藝能史研究』162。7月)は、「看聞日記紙背文書連歌」と世阿弥作の能を比較し、世阿弥の能作の背景を探る論考。論の中では、

「紙背文書連歌」と能の直接的影響関係は示唆していないが、須磨を舞台とする(松風)〈敦盛〉(忠度)、「源氏名寄」と類似する(野宮)、歌書書との影響関係が認められる(錦木)松浦佐用姫などは同じ知識基盤の上に成り立っていること、さらに『花鏡』にいう「冷えたる曲」に(砦)が該当し、「紙背文書連歌」と同じ美意識が認められることを指摘する。

前掲の「能と狂言」には通常の論文とは別に、「テーマ研究」のコーナーが設けられており、創刊号には、平成14年の能楽学会・世阿弥忌セミナーで行われた「応永三十四年演能番組」をめぐるシンポジウムのパネリスト四名の発表が掲載されている。田口和夫「応永三十四年演能番組研究について」は先行研究である八嶋幸子「(観世流史)参究(その二十)世阿弥出家直後の観世座―応永三十四年演能記録をめぐる―」(『観世』平12年10月)の紹介と当時の観世座の状況、十二次郎の所演目と二十五郎との関係などについての問題提起。所演目についての先行研究の見解や関連資料の一覧表が便利。落合博志「所見曲に関するいくつかの問題」は番組所見曲を機軸に、関係曲の成立背景にも言及する。(佐保山)に近接したところで(室君)が成立したことを示す論、仏牙舍利相伝系図をもとに盛久一族が清水信仰と密接な関係があることを示し、(盛久)の成立背景を探る論、「一児二山王」の詞章と「二帖抄見聞」の記事をもとに(大江山)が義持周辺で作られた可能性を示唆する論、(熊)に読み本系・語り

本系双方のテキストの影響があることを示し、当時の能作者には広略二系統のテキストがあったことが知られていたと推測する論からなる。山中玲子「応永三十四年の女体幽霊能」は番組所見曲のうち〈業平〉(仏原)を考察した論。〈業平〉について表稿は〈雲林院〉を想定したが、世阿弥自筆本〈雲林院〉が「業平」と呼ぶに相応しくなく、「申楽談儀」でも「雲林院の能」と呼ばれている以上その可能性は低いとし、〈井筒〉を想定する。また〈仏原〉については、本曲を元に世阿弥時代の女体幽霊能の特色に言及し、前シテ登場の場面でその人物が幽霊であることを示唆する詞章を世阿弥が意図的に用いていたことや、女体の幽霊に呂中干舞を舞わせるために後シテ登場の段階で成仏していると設定する工夫があることを論じる。竹本幹夫「世阿弥晩年期の能と能作者」は十郎・三郎・十二次郎と三人の演者ごとに、所見曲を検討した論。十郎所演曲には従来から元雅作と言われていた曲もあることを根拠に〈佐保山〉(艸)なども元雅作とする立場には、疑問を呈する。三郎所演曲は、いずれも世阿弥作である可能性が低いこと、また〈虎送〉については本来虎御前をシテとする女能であった可能性を論じる。十二次郎所演曲については酒宴の場があることや合戦場面があることなど、特徴が重複する曲を演じていることから、芸域の狭さを指摘する。「応永三十四年演能番組」の発見は従来の作能史の再考を迫る重要な史料であるが、本テーマ研究はその史料の問題点を具体化し、何が論じられるべきなのかを示しており、今後、これらを踏まえた研

究の深化が望まれる。

禅竹関係の作品を扱ったものは、三本が管見に入った。三宅晶子「一条兼良と金春禅竹」(『中世文学』) 48。6月)は、一条兼良と金春禅竹の間には濃密な交渉があったとし、禅竹作の可能性が高い(杜若)〈小塩〉の詞章を、「伊勢物語」古注、および古注説に否定的な兼良の「伊勢物語愚見抄」と比較検討する。(杜若)は古注によって作られているものの、(小塩)には古注色が薄く「伊勢物語愚見抄」と矛盾しないことから、そこに兼良の影響力を推測する。同「六条御息所の変貌」(『文学』414。7月)は、(葵上)と(野宮)を取り上げ、「能作者が読み取った六条御息所像から『源氏物語』を逆照射」しようという試み。生霊という要素を取り除いてみると、六条御息所が「意外にも平凡な人物」であると析出してみせる。石井倫子「解体する「家」とその再生」(藍染川)の世界を中心に」(『日本文学』5217。7月)は、家族の一員が死亡するが神仏の霊験によって蘇生する「恩愛霊験能」の(藍染川)に注目。近似する構想を持つ(竹雪)にも触れつつ、「紐帯たるべき父の不在ゆえにひとたびは崩壊の危機に瀕した「家」が、父その人によってその絆を取り戻すまでの「家」再生の物語」として読む。

以下、室町後期・末期の作品を扱った研究に、順に触れる。川崎剛志「作品研究(谷行)」(『観世』3月)は、(谷行)の背景にある伝承・宗教的理解を探る論考。シテの「ぎがくぎによ」は「義覚・義元」に由来するという天野文雄の指摘を踏

まえながら、室町期に役行者の弟子説、夫婦鬼説の二説として広まっていた大峯の二鬼の伝承の影響があること、子方・松若には親孝行として知られる役行者像が重ね合わされていること、物語の場には法華経の聖地としての伝承や、『金剛山縁起』に見られる葛木峯・霊鷲山同体説、役行者「釈迦後身説の影響があることを指摘する。伊海孝充「観世信光の切合能」(『法政大学大学院紀要』51。10月)は信光作とされる〈光季〉(知忠)を取り上げ、典拠たる「承久記」、八坂系諸本『平家物語』やそれ以前の切合能との比較から、前場の恋愛場面を簡潔にし後場の合戦場面の中心に働事を置くという特徴を指摘する。切合能を考える際の視座として「(場面を)区切る詞章」とその前後の登場人物の動きに注目し、本来その場所に働事が入っていたかどうか(働事を前提として作られた詞章か)を判断するという方法は、他の切合能を考える際にも有効と思われる。

小林健二「観世長後の作能法における一特色―番外曲(丸子)をめぐって―」(『能と狂言』創刊号)は、『能本作者註文』に長俊作として挙げる「みうえが嵩」と目される(丸子)の成立背景を検討したもので、同曲が丹後地方に流布した七仏薬師の縁起を典拠とし、当地に残る絵巻・掛幅絵に着想を得た在地性の強い曲であること、作能に三条西実隆・窪田統泰が関与している可能性があること、天文年間に竹野神社の神事猿楽に際して新作された可能性があること、間狂言に大藏虎明本『萬集類』所収「みうえ」が演じられた可能性が高

いことを論証する。同「能(真名井原)制作の動機と背景―『丹後細川能番組』に見られる上演記録をめぐって―」(『伝承文化の展望』)は、同能番組の天正十一年の演能記録が初出である(真名井原)が、このとき新作された曲であることを推測した論考で、真名で書かれた金札が降るという構想を(金札)から得、詞章は(竹生鳥(邯鄲))の一節を参照しているなど、先行する曲の影響が強いことや、この曲が丹後と丹波の境にある河守を舞台としていることを明らかにする。その上で、この催しが、当地の国人層を出自とする上原福寿軒が細川氏に降参した後の饗宴であり、当時織田信長の鼻唄を得ていた丹波猿楽の梅若に新作・上演を依頼した可能性が高いことを推測する。この二稿は作品の成立が特定の場と関わることを示唆する論となっており、これまでの作品研究ではあまり取り上げられなかった視点から、曲の特色に迫っている。前掲の天野稿と同様に、作能と演能の「場」との関わりは、今後さらに議論があつてよいテーマであろう。

長俊に関連した論が他に三本。高山尚子「番外曲(橋塚)の考察」(『立正大学大学院年報』20。3月)は、(橋塚)の諸本分析、典拠についての考察や、他の長俊作品との比較を通して作品の特色を論じ、「崇りや恋慕執心という相反する趣向を取り合わせた作品」と結論づける。信光作品が「能の中心人物を華々しく「散らせる」ことが多いのに対し、長俊の場合は「人物を「生かす」ことにこだわっているようにも思われる」との指摘が面白かった。江口文恵「観世弥次郎長俊

の作詞法と後世の評価」(『演劇研究センター紀要』Ⅰ)は、長俊作品の特徴として、①(厳島)に見られるように、典拠である『平家物語』をそのまま引用するといった素材への依存度が高いこと、②(異国退治)に(鶴羽)の影響が見られるように、先行作品の影響が強いこと、③(河水)と(老子)、(親任)と(廣元)に類似表現が見られるように、長俊作品の常套句があること、の三点を指摘、さらに演出注記などに詳しい江戸後期筆米沢上杉本をもとに、後代、スペクタクル性に富む長俊作品が演じやすいように改作されている例を示す。①②③は、どれもタイトルに言うとおり「作詞法」の指摘で、従来言われていた長俊の特徴とは別の面を明らかにしている。同紀要には、斐文卿「作品研究(豊干)」も掲載。従来典拠と指摘されていた『宋高僧伝』は、文殊の化身が寒山とする後場の設定と大きな差異があることを指摘した上で、成尋が天台山の国清寺に訪れたときの日記『参天台五台山記』に「景德伝灯録」の覚書として引用されている記事と(豊干)が類似する点から、「二次的資料」の存在を想定する。さらに、風雅を楽しむ衆生済度のために世俗にまみえることを厭わない寒山像は『寒山詩集』と類似し、本来童子であったと想像される文殊・普賢像は中世の嗜好が投影されていると推測し、長俊周辺で作られた可能性を示唆する。典型的な本説研究であるが、これまで注目されてこなかった資料が丁寧に分析されている。

若い人の論考を、もう二本紹介する。都築則幸「廃曲(粉

川寺)考―結末部の異文をめぐる―」(『国文学研究』140。6月)は、当該曲の諸本における異同を精査して、諸本の系統図を導き、結末部にある上掛り・下掛り間の異文が生じ諸本に取り込まれていった時期を、慶長〜寛文の頃と特定するとともに、その異文によって「男色的要素の強化」が図られたとする。橋場夕佳「謡曲(高安)の背景とその行方―伊勢物語注釈との関わりを中心に―」(『同志社国文学』58。3月)は、室町期の記録に見える番外曲(高安)を「伊勢物語聞書」などの古注釈と比較検討し、「伊勢物語注釈から派生したであろう」笛吹の松の伝承の上に立脚していると論ずる。また高安の女の「飯貝取る」行為が舞を舞う主人公としてふさわしくなかったことが上演されなくなった理由であるとの推測も示す。

『鏡仙』の「研究十二月往来」には作品研究は一本のみ。金賢旭「西王母伝承と『和漢朗詠集和談鈔』」(『鏡仙』512。3月)は、(西王母)の本説研究。「謡曲大観」が(西王母)の典拠とする「唐物語」とは、西王母が天から降りてくる場面に差異があるとし、能との類似性は中国の古典「漢武亭内伝」に認められることを指摘する。さらに「漢武亭内伝」をほぼ忠実に書きなぞったものに「和漢朗詠集和談鈔」があり、(西王母)の帝に桃を献ずる場面などはこれを典拠とすることを示す。中世に成立した古注釈、とりわけ『和漢朗詠集』の注釈書に、能の典拠となった豊潤な世界があることを示す好例である。

以上、オーソドックスな作品研究を並べたが、『演劇学論叢』6には「共同研究・観世元章の能楽改革(2)」として、三本の論考が載る。天野文雄「明和改正謡本と現代の能(一)―濁音から清音への改訂をめぐる―」は、明和本内組の五曲を対象に、「くれはどり」から「くれはどり」のような濁音から清音への改訂を調査し、観世流を中心とした現代の詞章の清濁に元章の改訂が与えた影響多大であることを明らかにする。橋場夕佳「観世太夫元章と〈関寺小町〉―元章手沢本『習十番』の書入をめぐる―」は、明和本における〈関寺小町〉の改訂を、早稲田大学演劇博物館蔵の『元章手沢本写』に見える元章の書き入れに基づき分析し、併せて同書記載の〈関寺小町〉演能記録を紹介・考察したものの、「典拠に忠実に沿った結果の改訂」が多いとの結論は予測の範囲内だが、書き入れの内容を丁寧に分析することで、「明和本刊行当時の元章を取り巻く学問状況」を考えることは重要であろう。他曲についても考察を広げていってほしい。長田あかね「小書『乏佐走』考―〈誓願寺〉〈当麻〉の後シテの装束をめぐる―」は、演出史研究。蓮華を天冠にかざす「乏佐走」の出力が元章の新考案で、舞事の省略や短縮化によって生まれる不足感を補う役割を担ったとする。また、〈誓願寺〉と〈当麻〉を「同列化」し菩薩像を共有させるとともに曲籍の違いや小書の有無による後シテ装束のバリエーションを設定することで、両曲の演出に幅や深みを持たせる効果があったとする。

演出・技法関係の論考が、他に二本。高桑いづみ「下間少進手沢車屋謡本本節付考」(『能と狂言』創刊号)は、桃山時代の謡の旋律を復元する試み。「塵芥抄」や能研蔵の車屋謡本に書き込まれた五声(宮商角徵羽)を基に分析し、「現在よりも音の動きが多く、歌謡としての性格が濃厚だった」との結論に至る。なお、この研究成果をも活かし、横浜能楽堂企画公演「秀吉が見た『卒都婆小町』」(02年11月)で演じられた謡は、華やかな旋律と軽やかなリズムで能のイメージを大きく変えるものだった。森田都紀「大蔵虎明筆『聞書并笛集付唱歌』に関する一試論―唱歌付の系統解明にむけて―」(『東洋音楽研究』68。8月)は短編の「研究ノート」。従来から一噌流系と考えられてきた伝書付載のものなので、唱歌付部分も「一噌流を基とする可能性を妥当」とする結論自体は目新しいものではないが、途中の論述部分は、複数の唱歌付を比較対照する際に重視せねばならぬ点と、記述法の差や装飾的奏法として無視して良い点とを具体的に挙げつつ丁寧に記述されており、演出・技法研究の資料として唱歌付を使いたいと考える専門外の人々にも益するところが多い。

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。和泉流台本の翻刻が二編。野崎典子・小谷成子「『和泉流秘書』(愛知県立大学附属図書館蔵)翻刻・解題三」(『愛知県立大学文学部論集国文学科編』51。2月)は、表題の書の翻刻の三回目で、巻二の前半

一〇曲を収める。雲形本研究会「翻刻 和泉流狂言『六儀』元番本(下)」(『能楽資料センター紀要』14)は、表題の書の翻刻の二回目で、後半の七曲を収め、完結。本文には改訂の跡がそのまま残されており、今後の検討が待たれる。

国語学研究者による台本研究が二編。大倉浩「祝本狂言集について(二)―狂言記・他台本との比較から―」(『筑波日本語研究』8。11月)は、(一)に続いて祝本の六曲を検討し、古いものではあるが、卑俗さや近世的な語法や用語が見えることを指摘する。朝留和洋「『狂言集成』の『鶯流』(中央大学大学院「論究」35-1。3月)は、『狂言集成』に「鶯流」として収める一二曲が安永森本を翻刻した『謡曲文庫第八巻狂言篇上』に拠ったことを明らかにする。狂言研究者にとっては常識で、取り上げるほどのことかとも思えるが、実はこれまで触れられたこともないのも事実である。安永森本の成立時期を示すとされた年記が一曲の付記に過ぎないことされるのもその通りで、私が「頃」を付すのもそのためなのだが、まともな検討が必要であろう。ただし列挙された付記本文には誤謬がある。

稲田秀雄「(翻刻)狂言名寄・内外間名寄(山口県立大学蔵)」(『山口県立大学大学院論集』4。3月)は、天保三年、山本直義(長州藩狂言方山本弥八家)に関係するかのことによる狂言等の名寄の翻刻。鷲伝右衛門派のもので、狂言には装束付が付記されている。

大蔵流の江戸前期の資料の紹介が相次いでいる。高桑いづ

み「大蔵虎明筆『式三番』(『芸能の科学』30。3月)は、表題の書の翻刻。先に『代伝抄』として翻刻した書の後半部分が実はこの書の後半部分であったとして、錯簡を正し、改めて全文を翻刻する。『わらんべ草』に言う「式三番の本」とは違うものらしいが、関連するものに違いなからう。小田幸子「『大蔵虎清狂言伝書』『大蔵虎明伝授目録』(同上)は、前者が寛永一八年に大蔵虎清が清虎に与えた狂言の心得等で、狂言論書と言うべきもの。虎清にもこの種の伝書があったのである。後者は万治三年に虎明が大倉助左衛門に与えた相伝状。関屋俊彦「大蔵弥右衛門家蔵『狂言印可勘状』(『能と狂言』創刊号)は、寛永七、八年に虎清が虎明に与えた印可状の翻刻。『わらんべ草』に「親より印可」と見えるものの実物である。これらを活用した大蔵流史の構築が期待される。次に史的研究。江戸前期を扱うものが二編。橋本朝生「大蔵長大夫家考」(『能楽研究』27)は、大蔵流の分家である長大夫家三代の上演記録のすべてを一覧表として載せ、それに各種資料を加えて事績を追い、長大夫家の消長を見ることで狂言史の一面に迫る。またこの家に伝わったという『大蔵流狂言秘本』が上演された形跡のない台本であるとする。池田英悟「延宝二年の大坂勸進狂言―番組と出演者をめぐって」(『能楽資料センター紀要』14)は、延宝二年の大蔵栄虎による大坂勸進狂言について、番組が父虎明の堺勸進狂言を意識したものであること、南都欄宜衆の出演が目立つことなどを指摘する。

江戸後期を扱うものが二編。小林英一「家元・名代・師匠・弟子―江戸後期西本願寺家臣の狂言入門―」(『河南論集』8。6月)は、西本願寺の家臣、上原家の文書から、この家の江戸後期の人たちが大藏八右衛門派の山川正九郎、続いて八右衛門虎良に弟子入りして伝授を受けたことを追い、江戸住みの家元から地方の弟子へ「名代」を介して伝授を行うというシステムがあったことを明らかにする。『大藏流式目控』の翻刻を付載する。川上孝也「花咲傳」を読む―近世狂言への視座―(『演劇学論叢』6)は、茂山千五郎家の八代とされる久藏英政の伝書「花咲傳」を読み解き、京都の大藏流狂言を支えた英政の意識に迫ろうとする。

次に作品研究。座頭狂言を扱うものが二編。山下宏明「狂言の笑いと能―平家琵琶を介して―」(『愛知淑徳大学論集』28。3月)は、(井礪)を例に盲人への悪意に満ちた笑いを狂言に認め、能で盲人を畏怖すべき対象とすることとの間にギャップがあるとして、時代の差によるものかとする。金蘭珠「座頭狂言」の笑いと仏教(『日本語・日本文化研究』13。11月)は、座頭狂言の笑いを仏教との関わりから解釈しようとするもので、(川上)と地藏信仰、(清水座頭)と観音信仰を取り上げ、座頭に「苦難に耐えて、根強く生き抜いてきたたくましい盲人芸能者の姿」を認める。

以下個別の作品研究。大森恵子「狂言「釣狐」の演出と稲荷信仰」(『伝承文化の展望』)は、単行本の一編で、(釣狐)の背景としての稲荷信仰を考え、小浜市和久里の壬生狂言の

(狐釣り)との違いに触れる。山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介(4)―「こんくわい」について―」(『学苑』751。3月)は、伊勢市馬瀬の馬瀬狂言で伝承されていた(こんくわい)の台本を紹介し、後半に三味線の伴奏による踊りが入るのを、伊勢神宮のお木曳という場で演じられたことと関係し、照葉狂言の影響によるかとする。これらは(釣狐)の受容として興味深い。

田口和夫(『附子』の古型―天正狂言本の誤写と祝本狂言集』(『鏡仙』511。2月)は、天正本(『附子砂糖』の「あさん」を祝本を参照して「けんさん(建蓋)」の誤写かとする。同「狂言(止動方角)の馬と呪文」(『文教大学』『言語と文化』15。3月)は、(止動方角)の馬を鎮める呪文「じやくれん童子六万菩薩、しづまり給へしたうはうがく」について検討し、「四道方角」で、「寂連童子ならびに六万菩薩たちよ、お静まりください。涅槃に至る道に入った聖者たちの方を御覧なさい(絶対に騒がしくなどはしていませんよ。見習いなさい)」の意とする。同「呂氏春秋」から(羊)(鶏猫)まで(『鏡仙』518。11月)は、和泉流(牛盗人)が(鶏猫)から作られたこと、その(鶏猫)は「呂氏春秋」を典拠とする能(羊)によるものであることを論ずる。

小林健二「狂言(八尾)の筋立ての源流」(『大谷女子大國文』33。3月)は、(八尾)に類似する話が八尾の里にまつわる「敬白萬人講縁起之事」という縁起にあることを指摘し、そうした話が古くから説法の種として語られていたかとする。

また地蔵と閻魔の男色の話は後に加えられた趣向であるとす
る。橋本朝生「狂言と唯識―(杭か人か)の形成と展開」(『能
と狂言』創刊号)は、(杭か人か)が唯識教学の書『法相二卷
抄』に見える寓話に類似しており、作り手が唯識教学の教え
を説法の間で聞いたのではないかとする。また「狂言記外
編」が古い形を示すかとする。これらは狂言への仏教の影響
を具体的に検証するものである。

関屋俊彦「狂言〔伊文字〕の周辺」(『紫明』12。3月)は、
「文字」の特集に寄せたもので、狂言のことは遊びの紹介。

奥山けい子「千人切」考」(『東京成徳大学研究紀要』10。
3月)は、黒川能の狂言に伝承された(千人切)が番外能(千人
切)によったものとする。綾子舞その他にも類曲があるとの
ことで、どこで作られたのかが知りたいところである。小林
千草「狂言「獅子舞」と信長の舞入り」(学燈社『国文学』
9月)は、(獅子舞)に織田信長の舞入りの場での齋藤道三と
の心理的かけひきを重ね合せてみる。

なお単行本の一編だが、大谷雅夫「形見の鏡」(『説話論
集』第十四集。清文堂出版。10月)は(鏡男)に触れて、天理
本の形が昔話の類型に近いとする。

次に演出研究的なもの。藤岡道子「英一蝶の描いた狂言」
(『聖母女学院短期大学研究紀要』32。3月)は、英一蝶の描
いた狂言絵とその模本を紹介し、特にリチャード・P・ゲー
ル蔵「狂言絵巻」について検討し、江戸の元禄期前後の実際
の舞台を描いていて演出の考察に資するものとする。作者・

成立時期のわかる狂言絵は貴重である。坂場順子「狂言に現
れる場所と移動 その3. 異次元の場所・演劇的效果」(『神
奈川工科大学研究報告』A-27。3月)は、狂言の空間表現
を考える一連の論考の完結編。霊界等の異次元空間について
検討した上で、場所の移動のもたらす演劇的效果を考え、見
せ所への契機となる場合、意外な展開への布石となる場合な
どがあるとする。

珍しく狂言小舞を扱うのが稲田秀雄「狂言小舞の性格」
(『山口県立大学国際文化学部紀要』9。3月)で、小舞を本
狂言・間狂言と並ぶ狂言役者の担当分野として位置付けて考
えようとする。成り立ちに座敷芸としての性格を持つものと
し、分類案を示しつつ各曲に検討を加え、小舞に用いられる
歌謡には中世後期から近世初期にかけての歌謡と交渉するも
のがあるとする。

次に間狂言研究。長田あかね「大蔵虎明による間語り改訂
―『伊勢物語』関連曲(融)(雲林院)をめぐる―」(『国
文学論叢』48。3月)は、虎明の間狂言台本二種、寛永本と
正保本とを比較し、寛永本に改訂の跡が認められ、それが
(融)(雲林院)の場合は『伊勢物語闕疑抄』などの伊勢注を参
照して行われたとする。先にできた寛永本に改訂があるのは
奇異なようだが、虎明時代の寛永本に工夫の跡があり、晩年
に子息に与えた正保本の方が本来の形を残しているというこ
とらしい。岩崎雅彦「跋扈する異類と妖怪」(『国文学』9
月)は、(山姥)の間狂言で山姥の成り立ちを語る部分を三流

で比較し、器物が妖怪になるという付喪神の考え方にいろいろな異説が取り入れられていったとする。飯塚恵理人「名古屋狂言共同社所蔵山脇和泉家伝来九冊組狂言本(一)」(『名古屋芸能文化』13。12月)は、表題の書の翻刻の一回目で脇能の語り間一九曲を収める。この本は笹野堅「古本能狂言・間につきての研究―和泉流本―」(『日本演劇史論叢』昭和12)に「山脇家間之本」として紹介されていたもので、山脇和泉家伝来に違いないが、ここに示された全冊の目録や詞章を見るに大蔵流のものである。古く貴重なものであることは間違いない。なお野村万作(聞き手 中司由起子)「奈須与市語について語る」(『観世』11月)は、語りとしても演じられる(八島(屋島)の替間(奈須与市語)について、語り手の位置が大事などの心得を語る。

最後に国語学的研究。小林千草「天理本『狂言六義』における「不審」―大蔵虎明本・虎寛本狂言との距離を計る―」(『成城大学短期大学部紀要』35。3月)は、「不審」の語に関する一連の研究の一環で、天理本におけるその様相が虎明本に近いものの虎寛本の様相に傾きつつある点もあるとする。筆録者の違いによる差異にも注意が払われている。小林賢次「大蔵虎明の狂言用語意識―本文注記の分析から―」(『香川大学国文研究』28。9月)は、虎明本の行間・上欄・曲末などの注記を取り上げ、虎明が詞章のさまざまな点で用語の適切さを吟味していたとする。これらは台本・作品研究にも関わるものである。

山田昌裕「室町末期から江戸初期における主格表示「ガ」の活動領域拡大の様相―『天草版平家物語』と『大蔵虎明本狂言』との比較―」(『文学・語学』175。2月)は、主節において格助詞「ガ」が活動領域をひろげていったことを『天草版平家物語』と虎明本を比較することで論ずる。同「狂言記から―仮想的追体験―(『国文学』3月)は、「狂言記」に「ガ」と「の」が共存する例について、その使い分けを見る。松尾弘徳「狂言台本における二重否定の当為表現―大蔵流虎明本・版本狂言記を中心に―」(『語文研究』95。6月)は、二重否定形式によって表現される当為表現について、虎明本では「イデ(ハ)カナハヌ」が主流であったが、狂言記では「ネバナラヌ」が主流となるとし、時代による変遷を見る。

永田里美「否定疑問文による行為要求表現の史的变化―「マイカ」から「ヌカ/ナイカ」へ―」(『筑波日本語研究』8)は、否定疑問文による行為要求表現として「動詞+マイカ」から「動詞+ヌカ/ナイカ」に変化するとする中で、「動詞+マイカ」が一般的な例として虎明本を引く。福岡健伸「中世末期日本語の「テアル」の条件表現―「テアレバ」は状態表現として解釈できるか―」(同上)は、「テアル」の条件表現「テアレバ」「テアラバ」の使い分け、「テアレバ」に状態表現として解釈できない例があることについて虎明本を引く。

【外国語による能研究】

◎単行本

Smethurst, Mae J., and Christina Laffin, eds. *The Noh Omniumeshi: A Flower Viewed from Many Directions*. Cornell East Asia series 118. New York: East Asia Program, Cornell University, 2003. xxvi, 332 p. (メイ・J・スメサースト・クリステイナ・ラフィン編『能(女郎花)——様々な角度から眺められる花』)

一九九七年十月にピッツバーグ大学で開催された、能(女郎花)をめぐる国際学会での討議を経て、参加者が新たに書き下ろした論文をまとめたもの。メイ・スメサースト、ステイブン・ブラウン Steven T. Brown、スーザン・ブレイクリー・クライン Susan Blakeley Klein、キャロル・モーリCarolyn A. Morley、脇田晴子、ウィリアム・ラフレール William R. LaFleur、スーザン・マチソン Susan Matisoff、アーサー・ソーンヒル Arthur H. Thornhill III、西野春雄、天野文雄、竹本幹夫、モニカ・ヘーテ Monica Bethé、鶴沢久(執筆順)といった国籍もまた研究アプローチも異なる研究者・実践者から、(女郎花)の翻訳、他作品や他ジャンルとの関わり、その宗教的意義や作者、演出、時代背景などを取り上げた多岐に渡る論文が寄せられている。国際的アプローチが能研究にもたらし得る豊かな実りを読者に印象付ける。

◎論文

Atkins, Paul S. "The Demon-Quelling Style in Medieval Japanese Poetic and Dramatic Theory." *Monumenta Nipponica* 58, no. 3 (Autumn 2003): 317-46. (キール・P・アトキンス著「中世日本の歌学と演劇理論における拉鬼体」)

定家の和歌理論にはじまった拉鬼体が、連歌理論および金春禅竹の能楽理論において発展していく様を詳しく論じる。

Borgen, Robert. "Stone Bridge (Shakkyō)." *Japanese Language and Literature* 37, no. 2 (October 2003): 104-16. (ロバート・ボーゲン著「石橋」)

〈石橋〉の始めての英訳(仏訳は、一九六二年に Gaston Renondeau によるものが *France Asie* 171 に収録されている)。翻訳の冒頭に付した注においては、本作品のワキである寂照の生涯と彼にまつわる諸伝説について詳しく記し、さらに作品における「中国風」な要素(漢詩の引用、獅子の舞)を指摘する。

Hare, Thomas. "The Emperor's Noh Clothes: Medieval Japanese Kingship and the Role of the Child in Noh Drama." *Cahiers d'Extrême-Asie* (Paris; Kyoto) 13 (2002-2003): 411-25. (トマス・ハヤー著「天皇の能装束——能にみる中世日本の王権と子役」)

能(国栖)の劇構造、ジャンル、子方の使用や装束を含めた

各役の造形などの仔細な分析を通じて、作品が発する多義的な政治的メッセージを読み解く。

Min, Tian. "Chinese Nuo and Japanese Noh: Nuo's Role in the Origination and Formation of Noh." *Comparative Drama* (Kalamanzoo, MI) 37, nos. 3-4 (Fall-Winter 2003-2004): 343-60. (ナイマン・ミン著「中国の儺と日本の能——能の発生と形成において儺が果たした役割」)

中国における儺の歴史を詳しく紹介するとともに、それが日本の仏教儀式、ひいては翁および能劇の形成に与えた影響を論じる。また、中国の儺儀と日本の追儺や能において使用される仮面を比較し、両者の類似性を明らかにする。

Rath, Eric C. "Remembering Zeami: The Kanze School and Its Patriarch." *Asian Theatre Journal* 20, no. 2 (Autumn 2003): 191-208. (エリック・C・ラス著「世阿弥を記憶に込めること——観世流とその始祖」)

十五世観世大夫元章、シテ方観世流第二十四世宗家左近、そして観世寿夫という三者が、それぞれの舞台活動および著作において、世阿弥と自分とのかかわりをいかに位置づけてきたのかを丁寧に追う。それによって、三者各々の能改革において世阿弥という権威がどのように用いられたか、また、それぞれの社会における能の認知を広げるために世阿弥の名声が果たした役割が、明らかにされる。

Rupert, Bonaventura. "La letteratura teatrale giapponese in Italia ovvero il teatro giapponese in Italia e il teatro italiano in Giappone." Tamburelo, Adolfo, ed. *Italia-Giappone: 450 anni*. Roma: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, Napoli: Università degli Studi di Napoli "L'Orientale," 2003. 573-88. (ボナヴェントゥラ・ルベリニ著「イタリアにおける日本演劇、あるいはイタリアの日本演劇と日本のイタリア演劇」)

戦前から戦中、戦後を経て現在にいたる日伊の交流を、演劇面から概観する。とりわけ、イタリアにおける日本古典演劇の上演・翻訳・研究の歴史に詳しく、能の受容には多くのページを割いている。

Thornton, Peter. "Monomane, Yugen, and Gender in *Izutsu* and *Sotoba Komachi*." *Asian Theatre Journal* 20, no. 2 (Autumn 2003): 218-25. (ゴーター・ソーントン著「井筒」と《卒塔婆小町》における物真似・幽玄・ジェンダー」)

ジュディス・バトラー Judith Butler のジェンダー理論を援用しつつ、《井筒》と《卒塔婆小町》における、女性キャラクターの男性への移り舞を分析する。

◎書評

クリスティス・グレイナー Christine Greiner 著『O *Theatro* *Nô e o Occident*. São Paulo: Annablume Editora, 2000. 136 p.

〔能と西洋〕、原文ポルトガル語)に対するエヴァン・ターウィン・ウイネット Evan Darwin Winet の書評が、*Asian Theatre Journal* 20, no. 1 (Spring 2003): 108-10 にある。一九七七年の『鷹の井』上演におけるイェイツと伊藤道郎の共同作業にはじまり、八十年代から九十年代にかけての能法劇団による同作品の上演、さらに「舞踏」の発展に至るまで、日本における前衛演劇運動は常に世阿弥の教えに立ち返り、そこに基盤を置いてきたと本書は論じる。

【付・外国語による能研究(二〇〇二年)】

外国語論文の紹介は『能楽研究』前号(二〇〇〇年、二〇〇一年)の論文を紹介(から始まった試みである。その際に取り上げられなかった二〇〇二年分文献のうち管見に入ったものを、以下に簡単に紹介する。

◎単行本

* Terasaki, Etsuko. *Figures of Desire: Wordplay, Spirit Possession, Fantasy, Madness, and Mourning in Japanese Noh Plays*. Ann Arbor: The Center for Japanese Studies, The University of Michigan, 2002. xvi, 329 p. (ハムロ・チロサキ著『欲望の形容——能における言葉遊び・憑物・幻想・狂気・哀悼』)

◎論文

* Moore, Timothy. "Japanese Kyogen in the Ancient Com-

edy Classroom." *The Classical Journal* 98, no. 2 (December 2002): 189-98. (トイキンニー・ムーア著「古代喜劇の授業教材としての狂言」)

* Noy, Kinneret. "Creating a Movement Space: The Pastageway in Noh and Greek Theatres." *New Theatre Quarterly* (Cambridge, England) 18, no. 2 (May 2002): 176-85. (キネレット・ノイ著「動作空間の形成——能とギリシヤ劇における舞踏」)

* Serper, Zvika. "Between Two Worlds: The Dybbuk and the Japanese Noh and Kabuki Ghost Plays." *Comparative Literature* (Eugene, OR) 35, nos. 3-4 (Fall-Winter 2001-2002): 345-76. (ソヴィカ・サーパー著「二つの世界の狭間で——ディブバック(訳注:ユダヤ伝説における死者の霊)と能・歌舞伎の亡霊劇」)

* Umai, Amparo Adelina C. III. "Yuko Yuasa's Biblical Noh Play *Hannya Miriam*." In *Across Time and Gender: Reading and Writing Women's Texts*. Conference Proceedings, University of Alberta, edited by Janice Brown and Sonya Arntzen, 284-88. Edmonton: Department of East Asian Studies, University of Alberta, 2002. (アンパロ・アネリーナ・ウマリー著「湯浅裕子の聖書能(ゆきんじやミリアム)」)